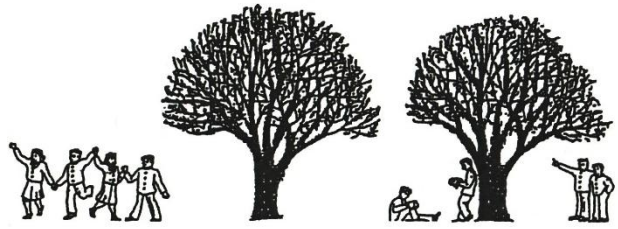


# 2本のケヤキ

第172号 (令和8年7月7日)



## 学校間交流

### inclusive (インクルーシブ) と exclusive (エクスクルーシブ)

令和8年度も、大泉高校や市立太田高校との学校間交流を活発に進めています。今年度もすでに、パン作りやポッチャ、スマイルボーリングなどを通じた温かい交流が実現しました。

私はこれらの交流のあいさつの中で、生徒たちに「インクルーシブ(包括的な/みんな一緒に)」と「エクスクルーシブ(排他的な/仲間はずれ)」という2つの言葉を紹介しています。「どちらの社会がいいですか?」と問いかけると、両校の生徒たちは皆「インクルーシブ」と答えてくれます。「期末テストに出るかもしれないから覚えておいてね」という冗談を交えつつ、障がいの有無や性別、国籍に関わらず、誰もが分け隔てなく参加できる環境の大切さを伝えています。このインクルーシブ社会と深く関わる言葉が、多様性を意味する「diversity (ダイバーシティ)」です。「みんな違ってみんないい」と言われるように、変化が激しく正解のない現代においては、全員が異なる視点や強みを持つ集団こそが、新しいアイデアを生み出し、時代を生き抜く強さを持っているとされています。しかし、昨年太田イオンで開催された「インクルーシブ・フェスタ」のパネルディスカッションでは、考えさせられる場面がありました。「今の世の中はインクルーシブ社会になっていると感じますか?」という司会者の質問に対し、参加した高校生代表(本校の代表生徒を含む)のほとんどが「なっていない」と回答したのです。この言葉は、私たち大人にとって大変ショッキングであり、身が引き締まる思いがすると同時に、強い責任を感じました。

インクルーシブ社会、共生社会の実現に向けては、日々の小さな実践や意識の改革が必要と考えます。学校としては、今後も続く学校間交流や地域の方々との交流など、貴重な機会を一つ一つ大切に重ねてまいります。

## 修学旅行(大阪方面)

本校の修学旅行は、平成29年度からそれまでの北海道方面から大阪方面へと変更し、今に至っています(コロナ禍を除く)。当時、私は一教員として検討委員会に参加していました。

北海道は「全員でバス移動し、同じものを見る」というシンプルな行程が組みやすく、見通しが持ちやすい反面、移動時間が長く生徒が退屈して不安定になりやすいという課題がありました。一方、大阪方面はUSJや海遊館など「目で見てすぐ楽しい」スポットがあり、生徒のモチベーションが高く移動の負担も抑えられます。人混みや大音量による過剰刺激のリスクはありますが、「都市部での実践的な社会経験」を積めることが決め手となり、変更に至ったことを記憶しております。

方面がどこであれ、修学旅行の本質は、学校の外という「リアルな社会」で自分らしく生きていくための実践力を育む、卒業後を見据えた「最大の社会移行支援(シミュレーション)」の場であるということです。

具体的には、次の3つの力を学ぶことができます。1つ目は「自己管理とマナー」です。新幹線やホテルなど多様な人がいる場所で社会的ルールを実践し、スケジュールを意識して行動する力を養います。

2つ目は集団行動における「協調」です。班別行動でともだちいけん、さいはなあおあなどの経験は、教室内での何倍も生きた学びになります。

3つ目は買い物学習の集大成としての「金銭管理」です。限られたお小遣いを計画的に使う計算力を実践で学びます。

今年度も、生徒たちにとって多くの実践的な学びがある素晴らしい修学旅行となりました。来年度も、大阪方面への修学旅行を計画してまいります。